

原子力安全委員会記者ブリーフィング

日時：平成23年5月26日（木）14：45～15：28

場所：合同庁舎4号館6階643号室

参加者：班目委員長、久木田委員、水間課長

○水間課長 では、今日は安全委員会臨時会合を行いましたので、その後の記者の皆様との対話ということでお願いします。

いつものお願いでございますが、この場での皆様とのやりとりにつきましては、速記録としてホームページで公表させていただきます。ご質問の際にはマイクをお渡ししますので、ご所属とお名前をよろしく願います。

それでは、質問をお願いします。

○共同通信田島記者 共同通信の田島と申します。何点かございます。先ほど、文部科学省から学校での被ばくについて説明があって、その中で学校外の被ばくについても話が及んだかと思えます。こういった地域社会の中での被ばくに関して、例えば、こうやったら低減できるだとか、そういったガイドラインみたいなものを安全委員会の方として示されるご予定はございますか。

○班目原子力安全委員長 安全委員会自身が例えば、いろいろな測定をするという能力は持っておりません。いろいろな提案をむしろ原子力災害対策本部の方からご提案いただき、それに対する助言という形にしたいと思っております。ただ、原子力安全委員会としても例えば、代谷委員とか調査委員の方を現地に派遣して、いろいろな情報は得ていますので、そういうことは対策本部の方にもご連絡した上で、考えていただいて、形としてはそれに対して更に助言をするという形をとりたいと思っております。

代谷委員から補足をお願いいたします。

○代谷原子力安全委員 今、委員長がおっしゃられた通りと思っております。ただ、前回、例えば、私が福島の高地に行かせていただいたのですが、そういうところで、実際に測っておられるところ、それから自分たちで測ったところというのがございます。そういう中で、こういう所が高いよというようなご指摘をしたこともあろうかと思えます。ということは、反対に言いますと、その高所を具体的にどうするかというところまで、我々が提示するところにはいかないと思っております。もしもといいますか、線量の高いところでは、当然のことながら、除染をする。その部分から、放射性物質を取り除くというのが一番いい方向ですから、そのときは、その高い所から先に対処するということになるかと思っておりますので、それに関する情報というのはお出しできるかと思っております。

○共同通信田島記者 学校の除染の話もそうですが、国の政策として原子力を進めてきて、実際に事故が起きて、学校の除染が必要になったというときに、自治体の判断でというのも、それで自治体の方からかなり反発の声が上がっているかと思います。そういった部分を原子力安全委員会としては、あくまで対策本部の方でガイドラインみたいなものがあるのなら、そういうのを作っていただいて、という形でちょっと待つというか、そういう姿勢でということによろしいでしょうか。

○班目原子力安全委員長 原子力安全委員会の立場というのは、このような原子力災害が発生したときには、原子力災害対策本部に対する助言機関という位置付けになっていますので、これはもう、それ以上のことはできないというか、我々自身、何か予算を持っているわけでもなければ、人員も非常に限られていますので、審議会に過ぎないということは、是非、ご理解いただきたいと思います。

○共同通信田島記者 分かりました。2点目です。防災指針の見直しですが、この時期的な目途というのは立っていらっしゃいますか。

○班目原子力安全委員長 時期的な目途は、まだ、できるだけ早くとしか申し上げようがございません。防災指針だけではなくて、他の安全審査指針類も当然、改定が必要なわけがございます。それに対しての検討は、なるべく早くやりたいと思っておりますが、例えば、今回の事故の実態というか、何が起きているのかということすら、まだはっきりしていないということ。それから別途、事故調査・検証委員会ですか、開催されることが閣議決定されていますよね。そちらの方のご意見は当然尊重しなければいけないわけですから、それを待つということではなくて、我々としても、予断を持たずに、我々なりの検討を進めてやっていきたいと思っておりますけれども、現段階では、いつから始められるということは、申し訳ないのですが、まだお答えできる段階にないということです。

○共同通信田島記者 それに関連して、E P Zで自治体の方で独自に半径10km圏の見直しというか、それを30km圏というような形で、各地で拡大しようという動きもあります。大体、I A E AのE P Zと同じような範囲かと思いますが、その30km圏で、それぞれの自治体が準備していらっしゃると思うところが多いと思いますが、30km圏の範囲の妥当性はというふうに考えていらっしゃいますか。

○班目原子力安全委員長 現段階では、まだ検討自体始めていないところなので、コメントは差し控えたいと思います。要するに、当然、我が国のいろいろな指針類を考えるに当たっては、国際標準に合わせていくべきだと思っておりますけれども、我々だけの独断で決めるわけではなくて、当然、これは基準指針部会の先生方に集まってもらい、更にその下に委員会を作って十分な議論をした末、結論を出すものですので、結論については、もう

そちらの方にお任せしたいと思っています。

○共同通信田島記者 最後にもう1点です。班目委員長は昨年、保安院の方の、これは原子力安全規制情報会議の方で講演をされていて、その中で、リレーションシップマネジメントのお話をされていたかと思います。保安院の方にはそういった、これは緊急事態の対応も含まれると思うのですが、そういった情報共有とか、情報開示の在り方みたいなガイドラインがありますが、安全委員会の方でこういったガイドラインを準備する考えというのはございますか。

○班目原子力安全委員長 安全委員会として情報公開の在り方に関しては、情報公開については完全に定まっています、基本的に公開ということで委員会決定をしてホームページにも載っているかと思います。

○共同通信田島記者 官邸の方の55分中断した問題だとか、そういったところで班目委員長が、去年講演の中でお話しされた情報の共有の在り方とか、そういったところで、ちょっと問題があったかなと思うのですが。基本的にはリレーションシップマネジメントみたいなものは、現段階の情報公開で十分というふうに考えていらっしゃるということでしょうか。

○班目原子力安全委員長 安全委員会としてはできる限り、情報公開に今も努めているつもりですが、例えば、どういう指摘をされているかという、最初の数日間というか、かなりの期間かな、議事録も何もないですね、という指摘を受けていることはよく存じ上げています。しかしながら、あの段階で議事録をとることを優先するか、それとも緊急に助言を求められているものに対する助言をすることの方を優先すべきかというのは、私には意見がございませけれども、多分、これからそういうのは検証委員会の方で検証がなされると思いますので、今はコメントを差し控えさせていただきたいと思っています。

○テレビ朝日村田記者 テレビ朝日の村田です。SPEEDIについてお伺いしたいと思います。3月16日以来、それまで文部科学省が運用管理していたSPEEDIを原子力安全技術センターのオペレーターさんと一緒に安全委員会に移管して、安全委員会が文部科学省を経ずに直接、原子力安全技術センターにいろいろな指示をして計算をすることができるといいう仕切りが、官房長官の指示によってなされてきました。この状態は、今後も続くのでしょうか。

○班目原子力安全委員長 緊急時だったから、そういうことになったのだと思いますし、あのような仕切りがなされたのは、SPEEDIというせつかく大きな予算をかけて作ったシステムがあるにもかかわらず、あまりいい使い方はできない状態にあったわけです。

従って、そこを安全委員会の方で知恵を絞って何かできないかということで、そういうことになったのだと思っております。今、現在もSPEEDIの運用について、安全委員会の方に一元化されたということは全くなくて、あくまでも安全委員会がいちいち文科省の方にお伺いを立てなくても使えるようになっていくということ、それからオペレータがこちらの方に来て実際に入力作業等々をやっていることは事実でございますけれども、我々の考えとしては、SPEEDIを活用するためのアイデアを出して、一定の成果を上げたところですので、そろそろ、これは幕引きすべきところだろうと思っております。

○水間課長 事務局から正確なところを申し上げますと、3月16日の段階ではモニタリング評価をしなければいけないということで、官邸からご指示をいただいて、そのモニタリングを実際にやるのは文部科学省、このモニタリングのデータについて評価をするということについては原子力安全委員会の方がやるように、というご指示はいただきました。

そのことにつきまして、じゃあSPEEDIまで安全委員会が全部やるのかということについては、そうではなかった。SPEEDIを使い勝手がいいようにしてもいいという話は関連省庁でいたしましたけれども、そのことについて、官邸から直接ご指示をいただいているということではございません。

○テレビ朝日村田記者 ということだと、振り返ってみて、その仕切りで、いちいち文部科学省に断らずにSPEEDIで残された機能を使って予測結果を出すのには効果があったということでしょうか。

○班目原子力安全委員長 私としては、SPEEDIというのを放射源データがないところをモニタリングデータ、環境モニタリングの結果から逆算して、放射源はこうであったという成果を上げたというのは、これは学術的には非常に高いもので、評価されるべきものだというふうに思っております。

○テレビ朝日村田記者 私がお尋ねしたのは、その計算したことではなくて、文部科学省に直接お伺いを立てなくてもやったということなんです。というのは最近、お尋ねしたところ、SPEEDIの端末でいろいろな条件を入力するというのは、パソコンに何か選択画面に入れていくのではなくて、原子力安全技術センターにお電話して、それで連絡する。その結果が文京区にある原子力安全技術センターのホストコンピュータから送られてくる。それを画面で開けるという作業が、この端末にある機能だと伺っているので、お電話でできるのだったら、移管するも何もなく、自由にできるのではないかと思うんですが。

○水間課長 別に、原子力安全委員会もユーザーの一機関でございますので、今、村田さんがおっしゃった通りです。

○テレビ朝日村田記者 とすると文部科学省は、後に明らかになったことでありますけれども、3月12日から16日までは、自ら38通りの予測を立てて避難に生かすようなSPEEDIの計算をしていました。保安院は、今も独自でやっています。ところが16日からは、安全委員会にオペレータも渡すし、分担を仕切って、文部科学省がやらないのでということで、その後は、毎日1時間ごとに定期的に出す単位放出量の予測結果を出すだけで、その後、SPEEDIを文部科学省が扱うことを拒否というか、放棄しているようなんですけれども。

○班目原子力安全委員長 放棄しているんですしたっけ。

○水間課長 放棄しているという言い方はよくないかもしれませんが、単位放出を行って関係機関に配信するという指示は、最初から国の基本計画にもそうなっていますし、それは事故が発生して以来、今でもずっと続いております。原子力安全委員会でも配信を受けておりますし、それからERCといいますか、経済産業省、あるいは今、本来のオフサイトセンターの方は機能がもちろん働いておりませんが、そういう単位放出については、きちっとそういうデータが当然のことながら配信されているということでございますので、別に、これは原子力安全委員会の方へオペレータが来ていても来ていなくても、同じことだと思えます。

○テレビ朝日村田記者 最後の質問ですけれども、以上の経緯で、文部科学省は官房長官の指示によりSPEEDIを運用して、その結果を出すことをやらない口実に、安全委員会を矢面に出しているような印象を受けますが、これには誤解はあるでしょうか。

○班目原子力安全委員長 政府の統一見解として、SPEEDIの運用を安全委員会に一元化したことはないと言われているはずですが、従って、今のようなご質問は、できたら文部科学省の方にさせていただきたいと思えます。

○記者 加藤さん、何かご存じのことはありますか。

○加藤審議官 私も最近出た、上野先生宛ての質問主意書、これは文部科学省も了解して作られて、閣議で決められたものですから、これが政府の統一された考えだと思っています。

○テレビ朝日村田記者 ありがとうございました。

○フジテレビ青木記者 委員長に海水注入問題でちょっとお伺いしたいのですが、フジテレビの青木です。東京電力が55分間の海水注入の中断について、現場の判断で海水の注入

は継続されていたという見解を間もなく発表するようです。これについて何か聞いていますか。

○班目原子力安全委員長 正直申しまして、さっき、チラッと聞いたのですが、本当ですか。

○フジテレビ青木記者 という発表をするということですか。

○班目原子力安全委員長 そうですか。で、私に何をお尋ねですか。

○フジテレビ青木記者 いつ、どういう形でこのことを聞かれたのでしょうか。

○班目原子力安全委員長 東京電力の関係者からチラッと聞きました。

○フジテレビ青木記者 チラッと、というのは何時頃、どういう形で聞いたんですか。

○班目原子力安全委員長 この会議が2時に始まったんですね。もう直前ですね。

○フジテレビ青木記者 どういう言い方をされたのでしょうか。

○班目原子力安全委員長 そういうことだったらしいという、それだけです。

○フジテレビ青木記者 そのことを聞いて卒直に、委員長の発言を巡っていろいろ混乱したわけですが、そういうことを聞いて卒直にどう思われましたか。

○班目原子力安全委員長 卒直に……。これは事実関係がまだ全然明らかになっていないので、卒直にも何もお答えしようがないのが現実です。つまり55分間の停止命令というのは一体誰が出したのかという話にそもそもなったところ、実は停止もしていなかったということは、一体何が問題なのでしょうねと。私の頭の中はハテナマークで、挙げ句、私が何か海水を注入すると再臨界が起こると言ったかのような話になってしまっていて、むしろ私の方が相当混乱しているというのが本当のところですよ。

○フジテレビ青木記者 結局、どこでどういうボタンの掛け違いがあったか分かりませんが、正確な情報が官邸にも政府当局にも伝わっていなかったということですが、委員長ご自身、この6時の会議の一員としていろいろこれまでに聞かれたと思いますが、当事者としてどういうふうに思われていますか。

○班目原子力安全委員長 当事者として？ 何をお答えしたらいいのか。何がお質問の趣旨なのか。

○フジテレビ青木記者 政府の混乱、情報がきちんと上がってこないという現状については、どういうふうに思われますか。

○班目原子力安全委員長 情報がきちんと上がってこないというのは、3月12日の時点ですか。

○フジテレビ青木記者 ええ。

○班目原子力安全委員長 3月12日の時点においては、官邸と東京電力の間のパイプというのはそんなに太いものではなかったもので、今から考えればもうちょっと、いろいろなやり方があったのかもしれないと思いますが、やむを得なかった点もあるのだろうなというふうに思う。そんなところですね。

○フジテレビ青木記者 それと今回は、官邸も政府も、55分の中断があったという前提で話がずっと進んできたわけですが、結果として中断がなかったという、この辺の情報の在り方については、どういうふうに思われていますか。

○班目原子力安全委員長 ですから、一体何がどうなっているのか、私に教えてください、というのが私の正直な気持ちです。

○フジテレビ青木記者 やはり不信感というのは芽生えていますか。東電なり政府なりに。

○班目原子力安全委員長 まず全く私に相談なしに、まるで私が「真水を海水に変えたら再臨界が起こるよ」と発言したかのような情報が流れたことに対しては、大変遺憾に思っています。せめて私に確認ぐらいはとっていただきたいかった、これは確かです。

ただ、訂正を申し入れたところ、すぐ訂正していただいたので、これについては、もうそれ以上は申し上げない、と約束した以上は、それ以上のことは申し上げるつもりもございません。

○フジテレビ青木記者 中断がなかったということについては。

○班目原子力安全委員長 中断がなかったら、一体私は何だったんでしょう。教えてください。

○フジテレビ青木記者 ありがとうございます。

○ニコニコ動画七尾記者 ニコニコ動画の七尾です。いつもありがとうございます。すみません、途中から来たもので申し訳ないです、重複したらごめんなさい。3月28日に、昨日の委員会で1号機、2号機、3号機のメルトダウンを示唆されていた。これが結局、せっかくの原子力安全委員会の発言が政府の方に伝わっていったのかどうか、という点についてはいかがでしょうか。

○班目原子力安全委員長 政府というのが一体誰か、というのがちょっとよく分からないのですけれども、3月28日に安全委員会としては、燃料は溶けているよときちっと助言という形をとっていますけれども、国民の皆さんに知らせたということですよ。その認識はある程度のレベルの方にはあったのではないかと私は思うんですが。それから、ずっと原子力安全・保安院に対しては、炉心の状況がどうなっているのかということの認識は、これからのいろいろな対策ですね、収束に当たっての対策に非常に重要ですので、是非、報告してくださいと、再三再四、求めたと思います。それにもかかわらず、なかなか求めに応じないばかりか、ちょっと我々から見ると物理学的に変だな、というような図も出されている。

で、実はさすがに昨日辺り、何か持ってくるかと思ったところ、まだ時間がかかりますと。その辺りについては、早く持ってきていただきたいなど。是非、議論をさせていただきたいと思っている次第です。

○ニコニコ動画七尾記者 1点追加で教えてください。原子力安全委員会と政府の関わりなんですけど、結局、何かあったときは、やはり保安院から政府の方に報告するという形になるわけですか。

○班目原子力安全委員長 正確なルートは多分、本来はそうあるべきなんだと思います。原子力安全委員会は、基本的には8条委員会であり、審議会ですから、行政機関ではございません。従って、原子力安全・保安院が実際の規制行政をやるわけですし、それに対して、我々が助言をするというのが本来の姿だったんだと思います。ただ、緊急時などには、私自身がずっと官邸に詰めた。これはこれで緊急時の措置として、そう間違ってもいいと思います。

○ニコニコ動画七尾記者 最後、そうしますと1号機、2号機、3号機のメルトダウンに関しては、対応は図れていたから、そんな緊急時ではないという言い方にもちょっと聞こえてしまうのですが、この点はいかがですか。

○班目原子力安全委員長 もし認識におかしなところがあって、それが安全を阻害するよ

うなことにつながるのであれば、これは最後は例えば、我々は勧告権まで持っているわけですし、何らかの処置をとったと思います。

○東京新聞榊原記者 東京新聞のサカキバラです。文科省からの報告のことでお伺いします。今日は1日8時間、年間200日とかですと、年間約0.31mSvとなるというご報告でしたが、まずこれについての評価を改めて。この0.31mSvというのは学校で1年間に受ける積算線量という理解でいいわけですよ。

○代谷原子力安全委員 その点について私の方から。それは文部科学省さんのおっしゃる通りであれば、そういうことですね。0.31mSvというのが、そうなりますよというお話だったと思います。それが学校のところで平均とかをとられているので、実際にそれがどういう意味があるのかということところは、実は非常にあやふやですね。というのは今も、現在、ご存じのように学校はそれぞれ通常の活動をやっているわけではなくて、かなり制限をしたり、何とかという部分がありますね。そういうことを加味して、そのままずっと続けなければならないようなこともありますし、それを各校毎に平均をとるとというのが、本当にそれで意味があるのでしょうかという部分があるので、これだけで本当に0.31mSvということではなくて、そこにありますように0から1.12mSvというか、そういう幅を持った値の中に入ってきます。これが大きな数字になってくるのだったら、やはりそのところは何らかの対策をとるべきでしょうというのが本当は正確なところではないかと思います。

○東京新聞榊原記者 文科省の方で校庭の使用基準で20mSv/年、3.8μSv/hと出しているのは、あれは学校以外での積算線量も推定して出している数字で、ですから一概にこの20mSv/年と0.31mSvを比較するとおかしくなるんですか。

○代谷原子力安全委員 0.31と20を比較するとおかしくなると思います。もともと文部科学省さんは校庭のところに人がいる。ただし8時間だけ外に出ている。中で普通の木造のところでということで、20mSv/年になるようにというか、それ以下になるように3.8μSv/hを決めたということをおられますね。ですから、それはそういう仮定です。現実にそういうことがあるのかどうかというのとはまた全く別の問題だと思いますし、我々の考えとしては、それがひとつそこからスタート地点に、それをスタート地点にするという考え方で、あと私たちとしてはもうご存じのように、モニタリングをして低減策を図ってほしいというのが趣旨でございました。

○東京新聞榊原記者 分かりました。あと、窓の開閉の測定について疑問を呈されていましたが、これは基本的にはγ線は開けても締めても変わらない。ダストが入り込まなければ値には変化がないというのは分かるという理解でいいんですか。

○代谷原子力安全委員 γ 線が変わってくるとすると、窓で γ 線が遮蔽されるというか、そこで γ 線が窓を通るときに減衰しますので、その効果だけです。ただ、普通の窓というのはそんなに分厚い窓を使っていませんので、ほとんどそのところではないに等しいぐらいのことで考えていいのだらうと思います。

あとは保護者の方たちがおっしゃっているのは、窓を開けたときに、外から埃が入ってきて、放射能を含んだ塵が入ってくることをご心配だと思うんです。私の方から言わせれば、実はそれはダストサンプリングをやって、既にその粗々のデータは取っておられるわけですね。まず、そのところで最大飛んできたとしても、これぐらいですという説明を先にされるべきではなかったかなとは思いますが、いずれにしても測定をしろと言われたので測定をされた。それは測定をして確かめられたということで、そういう理解もできますので、そのところを私の方からとやかく言うつもりはございません。

○東京新聞榊原記者 あとは、合理的に下げられる努力が、今後、大事になってくるかと思うんですが、土壌の除去以外に学校の方ででき得る対策というもので思いつくものがあれば教えていただけますでしょうか。例えば植栽、植物の葉っぱを切ったりですとか、校舎の壁を水で流したりですとか、そういったことが効果があるというふうにおっしゃる方もいるんですが。

○代谷原子力安全委員 今のことについては、具体的にどうされるかというのは学校の方で判断いただくことになるのだらうと思うんですが、今言われたようなこと、例えば普通のお家だったら屋根に積もっている可能性があるんだったら、その屋根のところ而降り積もったものを取り除く、要するに洗うということですね。それから、それは壁も一緒なので、壁もそういうことですね。コンクリートのところも同じことですね。それからあと、植栽と言われましたけれども、葉っぱがある、ついているようなところに降り積もったもので、葉っぱの中に吸収されちゃうとこれ取れないんですけれども、葉っぱの上に降り積もっているものは同じように洗い流すということができ得る。

それから、そういうものが流れていくということを考えると、溝のところには放射能濃度の高いものが当然、溜まっているであろうから、そういうものは何とかして取り除くというようなことですね。そういうようなことをやれば下がると思います。

この前ちょっと私の方から申し上げましたように、グラウンドは真ん中は高いです。だけれども、端っこへいくと高くなる場所がございます、というように申し上げたと思うんですが、それはまさに植栽のところですね。

○東京新聞榊原記者 今、おっしゃったような対策は、何か専門家の立会いなくでもでき得るものなんでしょうか。被ばくに注意、マスクをするなどしてやれば、やっても差し支えないようなものなんでしょうか。

○代谷原子力安全委員 それはどれだけ積もっているかにもよると思うんですね。線量がそれほど、今ないところとか、比較的低いところではそういう作業をやっても、自分たちが濡れないように、あるいはそれを直接接触らないようにというそういう手当てをすれば、要するにレインコートを着るとか長靴を履くとかゴム手袋をすとか、マスク、帽子、そういうことをすれば、十分に防げると思います。もしもついた場合は、あと洗い流せばいいわけですから、洗い流す、そういうことで対応可能だと思います。

○東京新聞榊原記者 分かりました。あと最後に、この0.31mSvという数字が出て、福島県の保護者の方がこの数字を理解するのは難しく、不安解消には結局つながらないのかなというふうに思うんですが。測ってみても、不安解消につながらないような状況になっているのかなと、個人的には思うんです。そういった中で、不安を下げるためには、和らげるためにはどういったことが今後、必要となるか、お考えがあれば教えてください。

○代谷原子力安全委員 そのこのところはどこで不安を感じておられるのかということにもよろうかと思えます。いずれにしても、今、被ばくが現存被ばくと言われる、そういう状況の中にあるというのは確かなんですね。20mSv/年を超えないところではあるけれども、反対に言いますと20mSv/年まで受ける可能性がある地域にいらっしゃるというそういう状況にあらうかと思えます。そういうところで、じゃあそこに住むんだったらどれだけ下げることかということですよ。もちろん住んでいるところの放射線量というのは、これはALARAということもありますけれども、できるだけ低減することが望ましい。

ではどこまででいいのということですね。今の状況で1mSv/年以下にしてくださいと言われると、そこにいらっしゃるって1mSv/年以下にするというのは、現実にはかなり難しいと思えます。不可能ではありません。どれだけお金をかけてもいいということであれば、それは可能かも分かりませんが。今度は、それをそういう状況にしたときに、それを取り除いたもの等の始末等まで含めて、すべて考えないといけないということが出てきますよね。

そういうところは、実際に福島県等を含めて、行政側でまさに議論をしていただきながら、その実際にでき得る措置というのを決めていただく、ということになるかと思えます。もちろん、個人的に被ばく線量を減らすという努力が可能な部分については、できるだけそういうことをしていただく、ということになるかと思えます。

○東京新聞榊原記者 本当に最後に、すみません。公衆被ばくの上限值が年1mSvということで、それと比較して年間約0.31mSvというのをどう評価するか。165日足りませんが、年間200日で1日8時間ですから、そこも比較する対象ではないということですか。

○代谷原子力安全委員 はい、これは比較されては困ると思えます。というのは、1mSvというのは1日24時間、365日ずっといる、その状態での値ですよ。それと、これは学校生活のところだけの値ですので、そこを比較して云々というのは、やはり私は間違っていると思えます。ですから、1年なら1年なりのところ、それぞれすべての生活を見ながら考

える必要があるという、これが本来の姿ではないかというように思っています。

○東京新聞榊原記者 ありがとうございます。

○読売新聞高田記者 班目先生にご質問なんですけれども、読売新聞社の高田です。先ほどのどなたかとのやりとりの中で、メルトダウンの関係で、保安院のスタンスとして、物理学的に変な報告をしているという表現をなさいましたけれども、ここをもう少し具体的に、どの報告がどう物理学的におかしいのかというのをご説明いただけませんか。

○班目原子力安全委員長 4月18日の委員会的时候に保安院の方として炉心の状態がどうなっているか示してくださいと要求したところ、非常におもしろい図を持ってきてくださって、被覆管が上の方は溶けている、ジルカロイですね。中の燃料は溶けているのか溶けていないのか、多分、真っ赤っ赤になってるんですから、少しは溶けている、飴状になっているんですかね。だけれども、形状は保ったまんまちょっと横倒しになっているぐらい。更にその外側の同じジルカロイのチャンネルボックスは、全く健全なままスクッと立っていると。更に、チャンネルボックスの間にある制御棒は全く無傷であると。どういうふうなことが起これば、こんなことが起こるのだろうか、私には物理学的に理解できない図を持ってきてくださったと記憶しています。

○読売新聞高田記者 ありがとうございます。

○共同通信田島記者 共同通信の田島です。地震直後に圧力容器自体が破損していたんじゃないかというような可能性があるというようなのが、東電のデータの方から分かったというような専門家の指摘でもありますけれども。地震が圧力容器に及ぼした影響について、班目委員長はどういうふうに見ていらっしゃいますか。

○班目原子力安全委員長 圧力容器自身が壊れていたという、何かそういう見解がどこから出ているんですか。圧力容器そのものですか、圧力容器そのものは、地震によって壊れる可能性というのは限りなく小さくて、壊れているとしたら中小配管。圧力容器といたら本当にまさに圧力容器ですよ。ただし、圧力バウンダリといった場合には、それにいろいろな配管類がくっつきます。配管類まで含めた場合には、地震によって絶対無傷だったとは、なかなか断言できない。またゼロではないと言うと何言われるか分からないので、やめておきますが。圧力容器自体が、地震によって壊れるというのは、私にはちょっと考えにくいですね。

○共同通信田島記者 中小配管まで含めた場合にはこれは考える。

○班目原子力安全委員長 恐らくですね、私もちょっと本当に時間がなくて、東京電力の報

告書に完全には目を通していませんけれども。おっしゃっているのは、H P C I、高圧注水系が働いたときに、圧力容器の中の圧力が70気圧ぐらいから、急にポンと10気圧ぐらいに下がって、H P C Iの方の運転が終わった途端に、元にポンと戻っているという、そういう圧力データが確か示されているんです。これに対して、H P C Iの蒸気配管ですね、H P C Iというのはタービン駆動で、そのタービンに圧力容器からの蒸気を供給して、タービンを回すものなんです。それで圧力容器内に水を送り込むという、そういう機能を持っているので。H P C Iが稼動している間だけ、圧力が下がったんだったら、H P C Iの蒸気系に、何か配管に穴が開いていて圧力が下がったのではないかという推論をする方もいらっしゃるし、昨日の保安院の報告もそうになってましたっけ。ちょっと、私忘れましたが、そういう説もあり得ます。

ただですね、私ももう本当に時間がなくて、手計算も何もできないんですが、70気圧から瞬時に10気圧まで下がるという現象というのは、H P C Iの蒸気系の配管から臨界流で出たとして、どれぐらいの速さで圧力が10気圧に下がるのかなとか。逆に今度はその元弁が閉じたときに、今度は、蒸気の発生だけでポンと70気圧に戻るのかなということを見ると、ちょっと、まだ計算をしてないので、専門家としての直感としては、うーん、どうだろうなという気はします。ただ、すみません、とにかく自分でチェックしたりあるいは報告書なんかを精査する暇がほとんどとれない状態ですので、ちょっとそんな気がするぐらいのところで今日のところは許していただきたいと思います。

○読売新聞高田記者 関連なんですけれども、読売新聞の高田ですが。直感で、多分、恐らく計器類がおかしいんじゃないかということをおっしゃっているんじゃないかと思うんですけれども、仮に70から10へ落ちてまた70に戻るという挙動自体も、そういうときならば計器としてあり得るのでしょうかね。

○班目原子力安全委員長 いや、ですから、計器がどうなっていたから、そういうデータになったのかというのは、これはもう申し訳ないんですけれども、計器の例えば配線であるとか、あるいは多分アンプがどこかについていて、どうのこうのとかいろいろなことになっているので、それが何かと干渉するかもしれないとか、いろいろな話があるんだと思うんですけれども、そういう詳細な図面というのを安全委員会の方では持っておりませんので、もしそうかもしれないなというとしても、それは推測にすぎません。一応補足しておきますけれども、私としては、まだどちらかだとはっきり申し上げているわけではなくて、予断をとにかく持たずに、きちんと原因はちゃんと説明すべきですよ。確かに、間違っていないですよ、70気圧から10気圧に急に下がってまた70気圧に戻ったんだと思うんですが、それはデータとしてとにかくちゃんとあるんだとしたら、その原因はひとつに決めないで、しっかり調べるべきだというのが、安全委員会としてのスタンスですので、その辺だけはちょっとお間違えいただかないようにお願いします。

以 上